

日本河川・流域再生ネットワーク <http://www.a-rr.net/jp/>  <https://www.facebook.com/JapanRRN>

「日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN) の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ.....	1
➤ 会員寄稿記事.....	4
➤ 会議・イベント案内 & 書籍等の紹介.....	9

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクト-「第9回淡海の川づくりフォーラム」参加報告

JRRN では今年度、「小さな自然再生」事例集編集委員会の協力を得ながら、過年度成果の事例集を全国に普及するとともに、本分野の情報交換や交流のコミュニティを構築し、小さな自然再生の仲間と裾野を拡げるための普及促進活動を実施してきました。2016年2月13日(土)に、淡海の川づくりフォーラム実行委員会及び滋賀県が主催する「第9回淡海の川づくりフォーラム」が滋賀県大津市にて開催され、当該活動の一環で参加して参りました。

本フォーラムは、「川や水辺と共生する暮らし」「川や水辺と私たちのいい関係」について考えることを目的に開催され、滋賀県内で活動する9団体及び県外の3団体の計12団体が日頃の川づくりの取組みを展示パネル・口頭発表にて紹介し合いながら、これからの川づくりについて議論を深めました。



フォーラムの様子

JRRN からは、「小さな自然再生」事例集の概要紹介と、昨年11月に滋賀県長浜市・高時川にて開催した現地研修会 (<http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/366> 参照) を中心に意見交換を行いました。

選考員・コメンテーターや会場参加者の皆様からは、「この事例集はいろいろな場面で使われるべきであり、どんどん広めていっていただきたい」、「研修会でのつながりが、今もフォーラムへの参加という形で続いているのが素晴らしい」、「事例集がどのような活動に反映されていたか、今後報告していただきたい」など、活動に対するご理解、応援の言葉をいただき、他の団体の熱意ある活動報告からも、今後の活動につながる活力をいただくことができました。



発表パネル (以下よりダウンロードできます)

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/396>

小さな自然再生の普及に向けた今年度の活動はほぼ終了となりますが、来年度も引き続き、事例集編集委員会メンバーと共に、水辺でできる「小さな自然再生」の普及促進に努めて参ります。

(JRRN 事務局・後藤勝洋)

小さな自然再生普及プロジェクト-「水辺の小さな自然再生」ホームページが完成

小さな自然再生の普及促進に向けた今年度の3本の矢「①現地研修会開催、②意見交換会開催、③ホームページ開設」の第3番目となる「水辺の小さな自然再生ホームページ」が遂に完成致しました。

<http://www.collabo-river.jp/>

このホームページは、小さな自然再生がどのような取り組みかを知りたい人、小さな自然再生に取組みたいが何から始めていいかわからず迷っている人、既に取組んでいる方々、さらに小さな自然再生を後押しする行政・民間等の方々を対象に制作したものです。

- 運営者：「小さな自然再生」事例集編集委員会
- 管理者：日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)
- デザイン監修：一般社団法人 ClearWaterProject

【ホームページの基本構成】

- 小さな自然再生とは？ (考え方を紹介)
- 小さな自然再生の進め方 (留意点などを紹介)
- 事例紹介 (事例集の13事例を含む事例紹介)
- ブログ (関連する様々な情報等を紹介)
- 行事案内&報告 (研修会等の案内と成果を紹介)
- 参考資料 (ウェブサイト、関連書籍等を紹介)
- 問合せ (相談窓口)

また、ホームページ開設に合わせて、小さな自然再生のコミュニティ活性化に向けた facebook ページも新たに設けました。



<https://www.facebook.com/collaboriver/>

今後、本ホームページや facebook を活用し、全国の小さな自然再生の活動事例や様々な情報を共有しながら、水辺の小さな自然再生に取組む仲間をつなぎ、知識や技術の向上を目指していきたいと思っておりますので、是非ともご利用頂ければ幸いです。

なお、本ホームページの制作は、公益財団法人河川財団による河川整備基金の助成を受けています。



JRRN 事務局からのお知らせ (3) JRRN Activity Report

「桜のある水辺風景 2016」 あなたの一枚 写真大募集！ 3月中旬より募集開始

桜のある水辺風景 2015 優秀 4 作品



2年前、仕事で全国の自治体から地域のシンボルとなる「美しい水辺とまち」の写真を収集しました。合計428点の写真的応募がありましたが、そのうちナント21%にあたる82点が桜の風景で、水辺の写真を構成する要素としてはダントツの1位でした。事ほど左様に、水辺の桜は画になるし、みんなに親しまれていると言えるのではないのでしょうか。

さて、前置きが長くなりましたが、今年も「桜のある水辺風景」の写真を募集します。現時点で、今年はやや早めの開花が予想されています。募集期間は、列島の南の開花時期の3月中旬から北の開花が一段落する

5月末までを予定していますので、お気に入りの1枚を是非ご投稿くださいませ。

過去6回開催してきましたが応募数が少なく伸び悩んでおり、みなさんの投稿が頼りです。忙しい年度末を乗り越えたら、桜の見える水辺に行って癒やされましょう。そしてオススメの1枚を投稿し、みんなで楽しみましょう。新たに行ってみたい桜の水辺が見つかるかも、ですよ。

※「桜のある水辺風景」写真集バックナンバー

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/category/cherryphotos>

(JRRN 事務局・阿部充)

JRRN 事務局からのお知らせ (4) JRRN Activity Report

海外交流報告 – 韓国・国土環境研究所視察団との技術交流 (2016年2月15日)

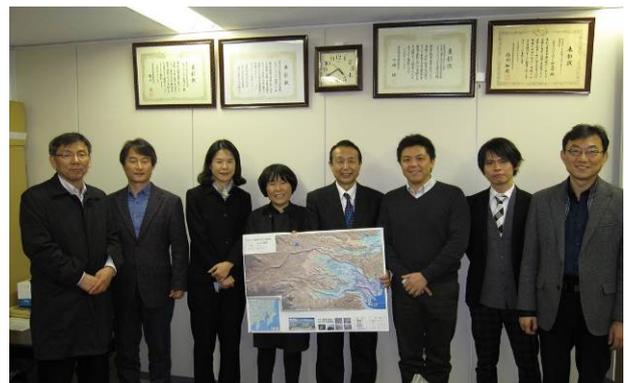


2016年2月15日(月)午後、韓国の「国土環境研究所」を始めとするNGOの研究員4名が来日され、日本におけるアオコ対策や水環境改善の歩み、また川づくりの市民連携などをテーマにJRRN事務局と意見交換を行いました。

・国土環境研究所ホームページ: <http://www.kried.kr/>

JRRN 土屋代表からは、日本のアオコ対策を含む水環境改善の歩みや首都圏の具体事例の紹介、また河川管理における市民連携の動向などについての話題を提供しました。また韓国側からは、韓国国内での河川環境や上水道の課題、特に住民啓発の難しさなどに関する話題を紹介頂きました。

日本の河川再生の経験の海外普及の一環として、今後も日韓の河川再生分野の情報・技術の交流を図りながら、日本国内にもその知見を還元してまいります。



(JRRN 事務局・和田彰)

JRRN 会員寄稿 (1) JRRN Member Contribution

手作り流速計の試作

寄稿者：川畑 遼介（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 白川直樹研究室『川と人』ゼミ・JRRN 会員）

流速計試作を思い立った背景

川の諸量の中でも、「流速」は魚類の生息条件や水質保全に関わる重要な値だが、市販に売られている流速計は高価であり、一般の市民団体が手に入れることは難しい。そこで、安価で手軽に川の諸量を測定できる道具を開発することで、今後市民団体によって、より高度な河川管理が行われるのではないかと考えた。

また、小学校の理科の授業においても、安価な手作り流速計を実際に河川で用いることで、子供たちが河川に興味を持つことが出来ると期待される。

材料

- ・木の板
- ・注ぎ口タワシの毛をむしり取った棒(45cm) (図 1)
- ・鈴(または直径 2~3cm 程度の球状のもの)
- ・紐

図 2 に、今回試作した流速計の完成品を示す。材料費は全部で 400 円程度とお手頃価格の流速計である。

制作に用いた道具

- ・のこぎり（木の板を切り出すため）
- ・電動ドリルドライバー（木の板に穴をあけるため）
- ・ペンチ（注ぎ口たわしの棒を加工するため）

使用方法

図 3 に実際の測定の様子の写真を示す。

まず流速計の木の板と水の流れが平行になるようにして、鈴を水につける。すると、水の流れを受けて棒が傾くので、その傾きを記録することで、流速が分かる仕組みである。

手作り流速計を使う以外で簡易的に川を測る方法としては、葉っぱを浮かべて流れる速度を見る方法があるが、その場合は水面の流速しか測る事が出来ない。しかし、この手作り流速計では、鈴を川底近くまで沈めると川底の流速を測ることができ、また水深の 6 割の深さまで沈めると、鉛直方向の平均流速を測る事が出来る。（流速は水面に近いほど速く、底に近いほど遅い。水深の 6 割の深さの場所では、平均流速で流れている。例えば、水深 100cm の場所であれば、60cm の深さの場所では、平均流速で流れている。）



図 1 市販の注ぎ口タワシ



図 2 流速計の完成品

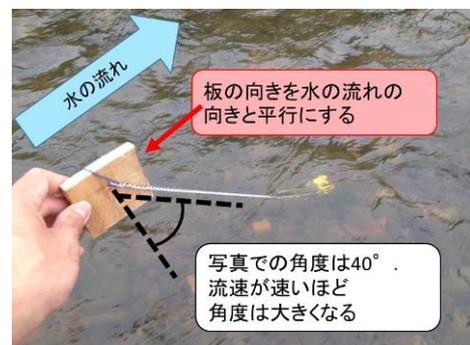


図 3 実際の測定の様子

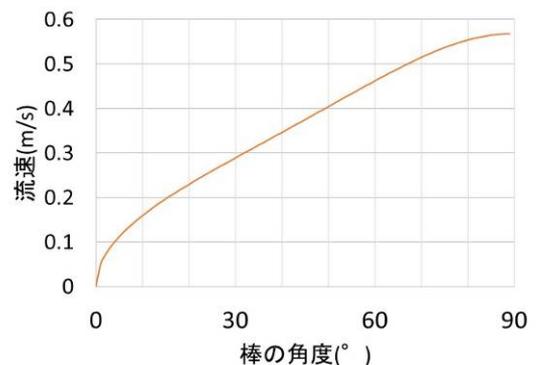


図 4 角度と流速のグラフ

角度と流速の関係

実際に使用する前に、流速がどれだけの時に、どのくらい棒が傾くのかを調べておく必要がある。

図4は、図3の流速計の場合における、棒の角度と流速のグラフである。例えば、棒の角度が50°を示した場所は、流速が0.4(m/s)だと分かる。

このグラフを作るためには、別の流速計が必要ではあるが、手元に1つ流速計があれば、手作り流速計をいくつも作る事が出来る。

他の材料を使った手作り流速計

先ほどは、注ぎ口タワシの棒を用いたが、棒部分が金属で重いため、流速計の感度が鈍い。

もし、流速が小さい川で用いるのであれば、注ぎ口タワシの棒の代わりに、アクリル棒を用いることで、より感度の良い流速計が作れる。

図5にアクリル棒を使った流速計を示す。アクリル棒は出来るだけ薄くする必要があり、図のものは長さ45cm、幅6mm、厚さ3mmである。

また、釘を用いてアクリル棒を板に固定することで、角度をより正確に測る事が出来る。

恵下の流速計

最後に、恵下が開発した簡易型流速計を紹介する。恵下は、学生あるいは子供達のための環境測定の道具として、簡易型の手作り流速計を試作した。詳細については、後述の参考文献*に掲載されているので、そちらの方もぜひ読んでいただきたい。

恵下の簡易型流速計を図6に、その仕組みを図7に示す。棒の上部にばねばかり、下部に半回転翼が付いており、半回転翼の上部はピンで固定されている。半回転翼の下端からは、棒先端の金具を通してばねばかりまで糸が繋がっており、半回転翼が傾くとばねばかりが下に引っ張られる構造になっている。

筆者、恵下それぞれが試作した流速計を比較すると、恵下の方は、半回転翼に当たる流速のみを測定出来るため、より正確な流速が得られると考えられる。一方、費用の面では、恵下の方ではばねばかりが必要なので費用が高くなるという点がある。

参考文献

*恵下 敏：生活環境教材研究V「簡易風速計と簡易流速計の試作」、宮崎大学教育文化学部紀要 自然科学 第14号(2006) 1-4 頁

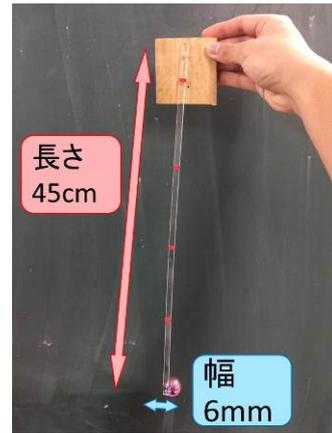


図5 アクリル棒を使った流速計



図6 恵下の簡易型流速計

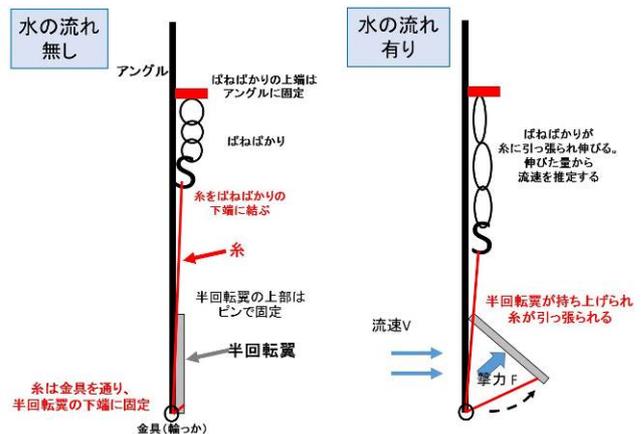


図7 恵下の簡易型流速計の仕組み

※流速計へのお問い合わせは寄稿者までお願いします。

kawahataryousuke@gmail.com

3月



あの日のあの川 リレー日記 ～第14話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第14話主人公 向田 隼

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：栃木県巴波川)

「青春以前」

いつのこと？：小学生

どこの川？：蓮花川

「あの日のあの川」。そう言われて思いつくのは実家の近くを流れていた小さな川。名前は蓮花川。当時小学生だった僕は、その小さな川にかかる、名前も無いような小さな橋を渡って毎日学校へ通っていた。蓮花川は、利根川水系の支川である渡良瀬川の支流だそうだ。もちろんそんなことは、当時は知らなかったし、興味も無かった。蓮花川は、登下校途中に通るただの小さな汚い川。それでも「あの日のあの川」と言われて真っ先に思いつくのは、この蓮花川なのだ。それは恐らく下校途中に毎日のように、その汚い川に入って遊んでいたからだと思う。「あの日のあの川」と言われずとも、「川」と言われて想像するのはいつもこの蓮花川なのだ。だからこの日記は、今回に関しては「あの頃のあの川」として書かせてもらおうと思う。あの頃、小学生のときの蓮花川との思い出を。人からしたらありふれていて、大した思い出ではないと思うけれど、個人的にはとても大切な思い出を綴るのが日記であると僕は思うから。

僕の地元はいわゆる田舎で、家の周りにはほとんど畑か田んぼ。遠くを見ても山ばかりだった。そんな田舎の子供たちが遊ぶ場所は、ほとんど野外しかなかった。だから当然のように僕らは、山の中に秘密基地を作ったり、空き地で戦争ごっこをしたり、畦道で蛙を捕まえたりして遊んでいた。それと同じ感覚で、下校途中には蓮花川で遊んでいた。

当時、よく一緒に下校していた友達がいた。僕は彼のことをげんちゃんと呼んでいた。彼は小学生にしては体が大きく、痩せ形の僕とは対照的だったが、何故か馬が合った。彼も田舎の子供の例にもれず、野外で遊ぶのが好きだった。だから気が付けば、蓮花川は僕とげんちゃんの下校途中の遊び場になっていた。蓮花川はコンクリートの小さな橋の下を流れていたが、橋の起点に用水路との合流点があり、そこが僕らにとっての蓮花

川への入り口だった。ランドセルを用水路脇の畦道に放り投げ、靴下を脱いで、ズボンの裾をたくし上げて、小学生にとっては少し高さのある場所から勢いをつけて飛び降りる。用水路の水が川へ入り込む所の川底はコンクリートだったので足の裏が痛いことはなかったが、苔がびっしり生えていてぬるぬるしていた。だから、着地の瞬間は、滑らないかどうかいつもどきどきしていた。そのぬるぬるの感覚は今でも思い出せる。とにかくこうして蓮花川に入ることができたら、あとは面白そうなものを見つけて、ひたすら日が暮れるまで遊び続けるだけだった。時にそれはザリガニだったり、オタマジャクシや蛙だったり、変わった形の石ころだったり、空き瓶や空き缶だったり、正体不明の機械の部品だったりした。何だって面白く、何だって遊び道具にすることができた。蓮花川は、「子どもたちがきゃっきゃと遊ぶ川」と言われて想像するような透き通った綺麗な川ではなく、「どぶ川」と言った方が良さそうな川で、水は常に濁っていて川底は全く見えない。でもそれが逆に、僕らにとっては良かったのかもしれない。足の指先に当たる不思議な物体の感覚。なんだろうかと想像をめぐらす。それをなんとか引き上げたら、ただの空き瓶だった。そんなことだらけで、まるで宝探しをしているようなわくわく感があつた。

ある日、いつもの通りにげんちゃんと蓮花川で遊んでいたら、げんちゃんが下流の方へ行ってみようと言った。僕らはいつも用水路との合流点付近でしか遊んでいなかったのだから、げんちゃんのその発案は、僕にとっては「冒険の旅に出よう」と言われているのと同じだった。僕はもちろん同意した。僕らは長めの木の枝を杖代わりにして、下流へと向かった。川底が見えないので、僕らは慎重に進んだ。下流へ進むにつれて、足の裏に当たる石の大きさが少しずつ大きくなっていくのを感じた。突然深くなる場所があったり、異様にぬるぬるしている場所があったりして、本当に冒険をしている気分だった。

僕らがいつも遊んでいた場所の水深はそれほど深くなかった。水面はいつも足首当たりか、深くてもふくらはぎのあたりにあつた。でも下流へ進むにつれて水深はどんどん深くなり、いつの間にか膝の上くらいまで水面が来ていた。たくし上げたズボンの裾は、既にすっかり水の中に沈んでいた。僕らはこれ以上は進めないと判断し、引き返すことにした。いつものように宝探しをしながら引き返していると、僕は突然足の裏に激痛を感じた。たぶんガラス瓶の欠片か何かで足の裏を切ったのだろう。泣き虫だった僕は、普段であれば泣いていただろう。でもその時は、勇敢な冒険家になり切っていたからか、それすらもひとつの冒険中の試練だと感じて、苦痛ではなかった記憶がある。共に冒険する仲間として、げんちゃんは僕を精一杯サポートしてくれた。蓮花川の入りに無事帰還し、地上へと戻る際も、げんちゃんは手負いの僕を気遣って手助けしてくれた。

この冒険は今思えば、20メートルも無いくらいの距離だったけれど、当時の僕らにとっては大冒険だった。何の発見も無かつたし、僕は怪我もした。普通なら嫌な思い出になっていたかもしれないけれど、見えない足場を進むわくわくとどきどきが何より楽しかつたし、げんちゃんが僕を気遣ってくれたこともとても嬉しかつた。翌日、僕は足の裏に絆創膏を貼って、また蓮花川で当然のように遊んだ。僕らにとって蓮花川は、怪我の痛みなんて気にならないくらい楽しい遊び場だったのだ。

それほど魅力的な遊び場だった蓮花川も、中学生になった頃からは僕もげんちゃんも、全く入らなくなっていた。新しい仲間や、部活動や、初恋。そんな所謂青春の始まりに、僕らは新たな魅力を感じ始めていたからだ。だから、蓮花川は僕にとって、青春以前の季節の思い出の場所なのだ。今では地元へ帰るたびに、蓮花川をちらっと覗いては、あの頃にほんのちょっとだけ帰る。蓮花川は今の僕にとって、小学校の卒業アルバムの1ページのような場所になっている。

(次は工藤拓哉さんにバトンを託します)



水辺からのメッセージ No.82

岡村幸二 (JRRN 会員)

古書院を望む：

回遊式庭園に顔をのぞかせる 数寄屋風の純日本建築物



撮影：2015年5月（京都府京都市・桂離宮）

◆視点場が前へ前へと移っていく

17世紀初頭に古書院が建てられたあとに、中書院、新御殿、月波楼、松琴亭などが新增築されました。創建以来火災に遭わない建築物群は、複雑に入り組む汀線をもつ回遊式庭園を引き立てます。州浜の先の岬灯籠や石橋に自らを浮遊させることで風景全容が見えてきます。

◆変わらぬ風景の中での変化

手前の石橋と中島のつながりは“天の橋立”に見立てたものですが、10数年前までは中島に大きな松がありました。今は消えてしまいました。桂離宮の風景も年月とともに変わります。

 JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)

(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

■ミズベリング ジャパン

- 日時：2016年3月3日(木) 16:00～
- 主催：ミズベリング・プロジェクト事務局
- 場所：渋谷ヒカリエホール (東京都渋谷区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2329.html>

■第13回RACフォーラム～水防災・安全管理入門

- 日時：2016年3月5日(土)～6日(日)
- 主催：NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会
- 場所：東京海洋大学越中島キャンパス (東京江東区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2353.html>

■第11回川の日ワークショップ 関東大会

- 日時：2016年3月5日(土)
- 主催：第11回川の日ワークショップ関東大会実行委員会
- 場所：江戸川大学 (千葉県流山市)

<http://jp.a-rr.net/jp/>

■第188回 河川文化を語る会

- 日時：2016年3月6日(日) 14:30～16:30
- 主催：公益社団法人日本河川協会
- 場所：TKP ガーデンシティ名古屋新幹線口 (名古屋市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2333.html>

■第3回鶴見川流域水マスタープラン改定記念シンポジウム

- 日時：2016年3月13日(日) 13:30～16:30
- 主催：鶴見川流域水協議会
- 場所：横浜市歴史博物館 (横浜市都筑区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2359.html>

■2016年度河川技術に関するシンポジウム

- 日時：2016年6月2日(木)～3日(金)
- 主催：公益財団法人 土木学会
- 場所：東京大学農学部 弥生講堂 (東京都文京区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2291.html>

■第16回川に学ぶ体験活動全国大会 in 琵琶湖・淀川流域圏

- 日時：2016年9月3日(土)～4日(日)
- 主催：第16回川に学ぶ体験活動全国大会 in 琵琶湖・淀川流域圏実行委員会
- 場所：摂南大学 寝屋川キャンパス (大阪府寝屋川市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2351.html>

■皆様からのイベント情報提供をお待ちしています！

全国で河川再生に関わる様々な行事が開催されています。ローカル情報のPRや共有を目的に、皆様からの情報提供をお待ちしております。

書籍等の紹介

Publications

■できることから始めよう 水辺の小さな自然再生事例集 (2015.3 発行)

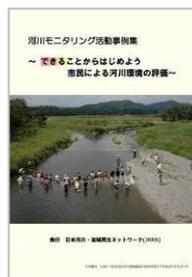
- ・監修：玉井信行 東京大学名誉教授 / JRRN 顧問
- ・編集：「小さな自然再生」事例集編集委員会
- ・デザイン：本間由佳 鶴川女子短期大学
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・出版年月：2015年3月



市民が河川管理者と連携して日曜大工的に取り組む「小さな自然再生」の事例集です。小さな自然再生の専門家の方々、専門知識の社会への橋渡しの専門家、そして有志の若手研究者や実務者で協働制作しました。

■河川モニタリング活動事例集～できることから始めよう 市民による河川環境の評価～ (2014.3 発行)

- ・監修：白川直樹 筑波大学准教授 (JRRN 理事)
- ・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関
- ・編集：JRRN 事務局、筑波大学白川(直)研究室
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・出版年月：2014年3月



市民が主体的に取り組む河川環境のモニタリング活動の実態を調べ、各地のモニタリング活動事例や市民による河川モニタリング活動の更なる活性化に向けたヒントを紹介しています。

■上記冊子の「印刷製本版」入手方法 ※PDF版はこちらから：<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/>

JRRN 事務局までご連絡ください。送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。(JRRN 会員限定)

JRRN 会員募集中 JRRN membership

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

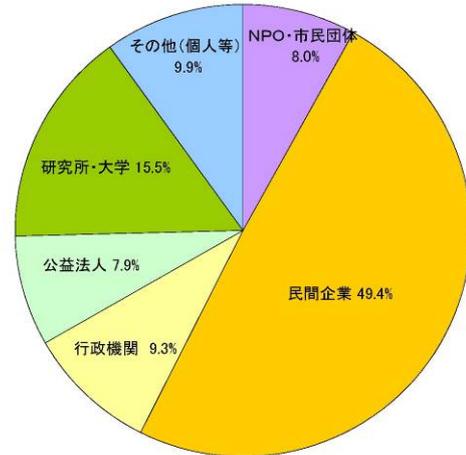
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週1回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2016年2月29日時点の個人会員構成

(個人会員数：730名、団体会員数：59団体)

※2月の新規入会数：個人会員4、団体会員0

JRRN 会員特典一覧表 (団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階 (公財)リバーフロント研究所 内

Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

